

# なみなみ通信

福岡県水産海洋技術センター情報誌

なみなみ通信は、水産海洋技術センターからの情報を、漁業者や県民の方々にお知らせする情報誌です。

## VOL.76

発行/令和6年2月



豊前海で水揚げされたガザミ

### 調査・研究情報

- 筑前海の海況予測情報による漁場の見える化…………… 2
  - トピック 鐘崎あまはえ縄船団が
  - 令和5年度農林水産祭で内閣総理大臣賞を受賞…………… 2
- 「うみえる福岡」で予測情報の発信を開始…………… 3
- 豊前海でガザミ種苗の放流手法を改良…………… 3
- アユ資源の回復に向けた取組み～受精卵放流～…………… 4

### 普及だより

- 有明海研究連合会が
- 第71回浅海増殖研究発表全国大会で水産庁長官賞を受賞…………… 4
- 4年ぶりに「おめで鯛まつり」を開催…………… 4

### 福岡県水産海洋技術センター

〒819-0165 福岡市西区今津 1141 番地 1

TEL:092-806-5251 FAX:092-806-5223

センターホームページ <http://www.sea-net.pref.fukuoka.jp/>

# 調査・研究情報

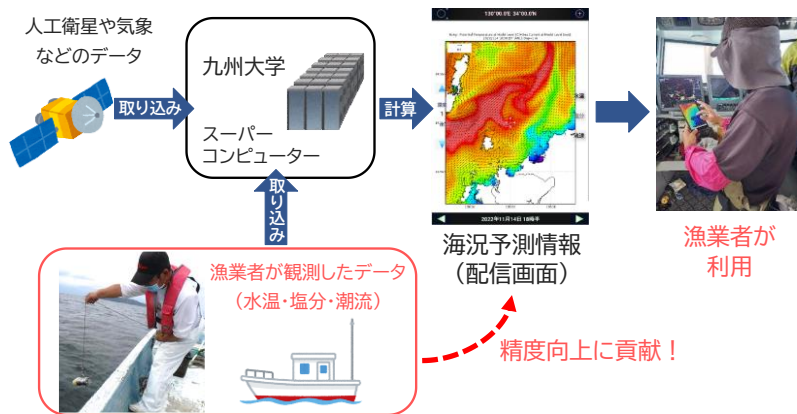
## 筑前海の海況予測情報による漁場の見える化

はえ縄やごち網などの漁船漁業では、永年の経験や勘を駆使して漁場を選定し操業していますが、若い漁業者は漁業に必要な技術や知識が不足しているため、向かった漁場では潮の流れが速すぎて、改めて漁場を選定するなど非効率的な操業を行うこともありました。

そこで、筑前海区では漁業者自らが漁場で水温や潮流などの観測を行い、そのデータを九州大学のスーパーコンピュータに取り込み、3日先までの海況予測を漁業者に配信するシステムを開発しました。漁業者から、「この情報を活用することで、燃油使用量の削減や労働時間の短縮、漁具の損失防止に繋がった」との高い評価が得られています。加えて「予測期間が長くなれば、より計画的な出漁や効率的な操業に繋がる」との声もあります。

そこで、システムに詳細な海底地形データを取り込むなど、7日先までの海況予測を提供できるよう改良に取り組んでいます。

今後も予測情報に対する意見を聞くなど、漁業者と連携し、予測情報の精度向上や活用普及に取り組めます。



システムのイメージ図

(水産海洋技術センター資源情報課)

### トピック

## 鐘崎あまはえ縄船団が 令和5年度農林水産祭で内閣総理大臣賞を受賞

11月23日に東京都で令和5年度農林水産祭式典が開催され、鐘崎あまはえ縄船団が内閣総理大臣賞を受賞しました。

当グループは前述の筑前海の海況予測情報の精度向上に積極的に協力し、その情報を漁場選定に活用することで、操業コストの削減や、操業時間の短縮という成果を上げました。これにより、科学的なデータを活用した操業へと漁業者の意識を変え、経営改善や後継者育成につながったことが評価され、今回の受賞となりました。(水産海洋技術センター資源情報課)



内閣総理大臣賞受賞の様子

(写真提供：株式会社水産経済新聞社)

## 「うみえる福岡」で予測情報の試験的な発信を開始

県では、有明海のノリ漁場に設置した観測塔で必要な海況情報（水温、塩分、潮位等）を収集し、インターネットを通じて漁業者に発信する福岡県海況情報提供システム（「うみえる福岡」）を運用し、多くの漁業者に利用されています。

現場での養殖管理では、潮汐表をもとにノリ網を吊るす高さを、昼間3時間程度の干出を基本として調整しておりますが、気圧や風向によっては潮汐表どおりに潮が引かないケースがあります。正確な潮位を予測することができれば、より高度な養殖管理が可能となります。

このため、既存データに加え、新たに観測した水温や潮位などのデータを用いて、有明海のシミュレーションモデルを開発し、3日先までの予測値を「うみえる福岡」で試験的に発信しています。

今後も、漁業者が必要とする情報の発信に努め、ノリ養殖の安定生産を支援していきます。

（有明海研究所のり養殖課）



うみえる福岡の画面

## 豊前海でガザミ種苗の放流手法を改良

豊前海では、ガザミ資源を増やす取組みとして、抱卵ガザミの再放流や種苗の中間育成・放流を行っています。これまでガザミ種苗（以下、稚ガニ）は、船から直接漁場に放流していましたが、放流直後に海中を浮遊している稚ガニが見受けられました。浮遊している稚ガニは魚に食べられやすいため、県では、漁業者とともに放流方法の改良に取り組みました。

稚ガニは魚から身を守るため、流れ藻に付着して生活することが知られています。そこで、人工的に流れ藻の環境を作れないかと考え、中古のノリ網を流れ藻の代用品として活用することとしました。まず、ノリ網を稚ガニがいる水槽に入れ、ノリ網に稚ガニを付着させます。次に、ノリ網を流れ藻に見立てるため、ノリ網が水面近くを漂うように、網に浮きやロープ、おもりを付け漁場に投入します。

1週間ほどで稚ガニは成長してノリ網を離れ、海底の砂に潜られるようになるため、放流1週間後を目安に網を回収しました。

今年の秋口に漁獲された多くのガザミは、そのサイズから6～8月に生まれたものと考えられ、稚ガニの放流時期とも重なることから、一定の効果があったものと考えています。

今後も漁業者と連携しながら、ガザミ資源の増殖に取り組んでいきます。

（豊前海研究所浅海増殖課）



ガザミを付着させたノリ網の放流

## アユ資源の回復に向けた取組～受精卵放流～

アユは内水面漁業の重要魚種ですが、今年は、7月の豪雨により、筑後川や矢部川で産卵場の環境が悪化したことから、県では海に下る仔アユを確保するため、緊急的に今秋、約8,000万粒の受精卵を河川に放流しました。

受精卵には、卵と精子を人工的に受精させ、サランロック（付着器）に付着させた後、河川ですぐにふ化できるように、ふ化直前の発眼卵（「眼」が観察される卵）になるまで陸上水槽で育成したものを用いました。

この発眼卵は、数日後にふ化し、仔アユとなって海へ下っていきました。仔アユが海で順調に育ち、次年度のアユ資源につながることを期待しています。

（内水面研究所）



アユの採卵作業

## 普及だより

### 有明海区研究連合会が 第71回浅海増殖研究発表全国大会で水産庁長官賞を受賞

6月7日に佐賀県で第71回浅海増殖研究発表全国大会が開催され、有明海区研究連合会が水産庁長官賞を受賞しました。

令和4年度のノリ養殖は、かつてないほど大規模な栄養塩不足による色落ちにより、例年の5割程度の生産枚数となりました。今回の発表では、その中で、各自で行った養殖方法の工夫やその結果をまとめ、今後栄養塩不足が起こった際に有効な対策を提示したことが評価され、今回の受賞となりました。

（有明海研究所のり養殖課）



水産庁長官賞受賞の様子

### 4年ぶりに「おめで鯛まつり」を開催

11月25日に、水産海洋技術センターでは、一般開放イベント「おめで鯛まつり」を4年ぶりに開催しました。県民の皆様に、水産業についての理解を深めてもらうため、試験研究成果のパネル展示や子供達が生きた生物に触れるタッチングプールやノリ手摘み体験などのイベントを実施しました。参加者からは、「遊ぶだけではなく福岡の魚のことが学べて良かった」などの声が聞かれ、好評をいただきました。

（水産海洋技術センター企画経営課）



タッチングプール